日本キリスト教会　広島長東伝道教会だより

# ミニバラ No.5

〒731-0135　広島市安佐南区長東3-32-16　☎082-238-3459

2004月7月発行

## 霊であり命である言葉

**「命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」**
**（ヨハネによる福音書６章６３節）**

英国の詩人ロバート・ブラウニングは、或る詩を、「一人のキリスト者であることは、何と難しいことであろう」、と言う言葉をもって始めました。確かに、主イエスのお言葉は躓きに満ちています。或る日主イエスが、御自分のことを、「命のパン」（ヨハネ６：４８）と言い、「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」（同５４節）、と言われたとき、これを聞いていた多くの弟子たちは、「実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか」（同６０節）、と口々につぶやきました。

“ひどい”とは、或る英語の聖書では、ただ一語だけで、“ハード”と訳されています。“ハード”に、“ひどい”と言う意味があるのは勿論ですが、“難しい”とか、“固い”とか言う意味もある言葉です。「固くて、難しくて、とても受け入れられない」、と言う意味をも含めて、“ハード”と訳したのでしょう。しかし、カルヴァンは、「固いのは、主イエスのお言葉ではなく、人間の心の方ではないか」、と言います。人間は、何時も自分を基準として考えますから、自分の基準に合わない場合には、相手がおかしい、と直ぐに思ってしまうのです。相手がキリストの場合でも、同じように、自分の基準で、その言葉をはかろうとしますから、「実にひどい話だ」、と言うつぶやきも、つい出てしまうのです。

しかし主イエスは言われます。「命を与えるのは、“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である」、と。肉とは、人間の理性とか感覚、或は知識とか経験と言った、人間的な能力のすべてを指します。「肉は何の役にも立たない」とは、随分極端な表現のようにも思われますが、しかしこれは、極端でも何でもなく、事実、聖霊の導きなしには、限りなく深いキリストのお言葉も、詰まらない寝ぼけた言葉にしか聞こえないのです。良くて高々処世訓か道徳律にしかならないのです。ましてや命の言葉には、なりようもないのです。

コリントの信徒への手紙一２章１０、１１節に、「“霊”は一切のことを、神の深みさえも究めます。人の内にある霊以外に、いったいだれが、人のことを知るでしょうか。同じように、神の霊以外に神のことを知る者はいません」、とあります。神のことは、従って神の御子でいますイエス・キリストのことは、神の霊、つまり聖霊によらずしては、分らないのが当然で、それはあたかも光によらずして物を見ようとするに等しく、所詮不可能なことなのです。

日本キリスト教会信仰の告白の中に、「新旧約聖書は神の言葉にして、そのうちに語りたもう聖霊は、主イエス・キリストを顕示し、信仰と生活との誤りなき審判者なり」、と言う一節があります。もし聖書が読まれるとき、聖霊が共に働いてくださらないなら、聖書の言葉はそのままでは神の言葉にはならず、主イエス・キリストを顕かに示さぬばかりか、信仰と生活との誤りなき審判者にもならないのです。聖書を通して聖霊が、私共の心に働きかけ、固い石地のような心を、砕いて柔らかくし、良い地にしてくださるとき、キリストのお言葉は、初めて本当に、私共の心の内で、生きて働き、私共に命をもたらすものとなるのです。

このように、一人のキリスト者が生まれると言うことは、正しく聖霊が引き起こす驚くべき奇跡なのだとすれば、私共は、先のブラウニングの、「一人のキリスト者であることは、何と難しいことであろう」、と言う言葉を、今や、「一人のキリスト者であることは、何と光栄で、喜ばしいことであろう」、と言い換えねばならないのではないでしょうか。

牧師　三輪恭嗣

（２００４年６月１３日の礼拝説教より）